



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 章學誠の思想構造  |
| Author(s)    | 黒田, 秀教  |
| Citation     | 大阪大学, 2006, 博士論文  |
| Version Type |   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/46581">https://hdl.handle.net/11094/46581</a>   |
| rights       |   |
| Note         | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。 |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

|            |   |
|------------|---|
| 氏名         | 黒田秀教 <sup>くろだ ひでのり</sup>                        |
| 博士の専攻分野の名称 | 博士(文学)  |
| 学位記番号      | 第 19938 号                                       |
| 学位授与年月日    | 平成 18 年 3 月 24 日                                |
| 学位授与の要件    | 学位規則第 4 条第 1 項該当<br>文学研究科文化形態論専攻                |
| 学位論文名      | 章学誠の思想構造  |
| 論文審査委員     | (主査)<br>教授 湯浅 邦弘<br><br>(副査)<br>教授 高橋 文治 講師 辛 賢 |

### 論文内容の要旨

本論文は、申請者が平成 12 年度に修士論文「章学誠の「道」概念」として提出した研究を更に発展させ、既発表論文「章学誠における経書の位置」（『待兼山論叢』37 号、2003 年）を中核として、清朝の思想家・章学誠の思想を体系的に解明しようとするものである。

全体は、研究史をまとめた序章に続き、第一章「章学誠の世界観—「六経皆史」説の「道」—」、第二章「章学誠の「六経」擁護」、第三章「章学誠の思想形成」の三章からなる。

章学誠は、「考証学」の時代と総括される清朝にあって、「六経皆史」説を唱え史学思想を称揚した思想家として著名である。しかし、多くの先行研究に於ても、その実像の把握や思想史的な位置づけは必ずしも明らかではない。そこで序章では改めて、内藤湖南、胡適、余英時、山口久和など、章学誠に関する先行研究を丹念にまとめ、問題点を整理する。その第一は、章学誠における「道」と「器」の関係、すなわち世界観の問題であり、第二は「六経」に対して章学誠がいかなる評価を持っていたのかという問題である。

この序章をうけて、第一章では、章学誠の想定していた理想的世界観を、「道」の語をキーワードにして探る。ここでは、「道」は人の発生に先立って既に完全な形で備わっていたこと、「道」は「一陰一陽」する動的な存在であること、人間が認識できるのは、道そのものではなく、経書に記された「道の迹」にすぎないこと、などが明らかにされる。またこうした世界観の中で、自己の才覚を信じて学問に励めば「道」に近づいてゆけるとしながらも、基本的な人間の能力・意志に対する考慮を欠くという問題点があることをも指摘する。

また第二章では、前近代の知識人の思惟の前提であった「六経」に対する章学誠の態度を分析する。これまで、章学誠と「六経」との関係については、章学誠が「六経」に相当の尊厳性を認めていたという考え方と、そうではないとの考え方とが並立していた。これに対して本論文は、章学誠が「六経」自体の価値を擁護する極めて保守的な立場にあったことを指摘し、章学誠が「六経」の価値を低く見ていたという従来の説は、「六経皆史」という章学誠のスローガンに引きずられた誤解であることを明らかにする。

さらに第三章では、そうした章学誠の思想が形成されるに至る過程を、章学誠の青少年期、中年期、晩年期に分けて考察し、また、その淵源を宋学（朱子学）に遡って検討しつつ、章学誠の思想体系に相容れない要素が併存していることをも明らかにする。この内、人間の個性を尊重しようとする人間観と、人間の才能を悲観的に見る人間観とが章学誠の中で混在している点については、章学誠の青年期の体験が強い影響を与えていると指摘する。

## 論文審査の結果の要旨

章学誠は「六経皆史」説を唱えた著名な歴史学者とされるが、その盛名とは裏腹に、その思想の評価については全く異なる見方が併存するという異常な状況にあった。一つは章学誠の基本的な世界観、すなわち「道」と「器」との関係、今ひとつは、章学誠の「六経」評価である。これは、章学誠の思想体系が十分に検討されないまま、研究者個々の抱く章学誠イメージが先行していた結果であろう。

本論文は、こうした先行研究の状況を的確に把握し、整理した上で、最も重要な論点である「道」と「器」との関係の問題、および章学誠における「六経」評価の問題に的を絞って考察を加えたものである。

その考察は、章学誠の名著『文史通義』の解説を通じて実証的に行われており、概ね的確な結論を提示できている。また先行研究で揺れていた点を一つ一つ確定し、また、なぜ先行研究が異なる見解を示していたのかを明らかにした点は、高く評価できる。さらに章学誠の思想の形成過程を、章学誠の人生の歩みと宋学（朱子学）に遡って追究できた点も大きな収穫である。

ただ、「六経皆史」という言葉の持つ思想的な衝撃が同時代や後世にどのような影響を与え、またどのような評価を受けたのかという点については論じられていないなど、今後の課題とすべき点も残る。

とは言え、本論文は、章学誠の思想の形成過程とその全体像を解明した意欲的な研究であり、清朝学術史研究の進展に大いに寄与するものと評価できる。よって本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。